

紀要創刊号の刊行に当たり

公立小松大学が発足してはや9か月が過ぎようとしています。近年、日本各地で公立大学の開学が相次いでいますが、全体として、理系、実学系、応用系が多数を占めていると思われます。その中で、私共の国際文化交流学部は小所帯ではありますが、人文社会科学系総合学部を標榜し、経済学、政治学、文化人類学、言語学、文学等の基礎研究を土台としながら、観光、地域創生、異文化間コミュニケーションなど応用的な研究教育を進める体制となっています。文系諸学はいわば個人商店の集合体の側面がありますが、本学部では自立した研究遂行能力を有する個々のスタッフが、異分野融合の研究に取り組む萌芽もあり、また教育面では良好なチームワークを保持しています。

本学部の教育方針・カリキュラムに二つの特徴があります。一つは、“授業3年+就活1年”という現在ありがちな風潮を除くこと。これは元々政府の方針でしたが、現在、経済界の都合で、逆風が吹いているのは遺憾です。二つ目は、海外研修は2年間教室で鍛えた後に実施すること。「国際」を冠する学部、学科には、1年次から学生を海外に行かせる所が多くなっていますが、それと対照的です。この二つの方針は、「大学教育は4年間で完結する、学生は卒業時に最高の学力と人間力を身につけて巣立つ」という理念に基づいています。そのため、授業履修の上限も比較的厳しく設定しています。学生や保護者から不満が出るのは織り込み済みでしたが、幸い、学生諸君はよくついてきてくれています。私たちの教育は、1年後、つまり現在の1年生が本格的に専門分野の学習に取り組み始める頃から、真価を発揮するだろうと予想しています。北陸の長い冬を前に、現在は、学生も教員も基礎を固める時期、忍耐の時期でもあると思います。

このような時期に紀要『国際文化』が刊行されるのは誠に嬉しい限りです。正直、初年度から紀要が刊行できるとは予想していませんでした。それが実現の運びになったのは、なんといっても岡村徹教授の熱意とご尽力の賜物でした。資金面では大学の援助をいただくことができました。

本誌は査読体制を整え、外部からの投稿、寄稿も可能としています。このような人文社会科学複合型の学術誌を維持し、発展させることは決して容易なことではありません。しかし、創業の志をいつまでも忘れず、本学部の学術面の“顔”として、誌面の充実を図っていきたいと考えています。読者諸賢にはどうぞご支援をお願いします。

2018年11月30日

国際文化交流学部
学部長 岩田 礼